

## 文京洙

### 「韓国現代史と日本」

日本の敗戦間際のソ連の駆け込み参戦によって朝鮮半島は戦後の冷戦の最前線の地となった。朝鮮の分断は、日本が背負うべき歴史の負債を肩代わりするような意味をもった。韓国では植民地支配の遺物が温存され、四・三の悲劇も元をただせばそのことに発している。その後の韓国の歩みは、親日派に根をもつ社会の主流派が支配層として君臨した歴史であり、四・三事件の真相

究明や名誉回復の取り組みもこの主流派への挑戦の意味を持たざるをえない。盧武鉉政権期(2003年~07年)にはすすんだ過去精算は、韓国の主流派を揺るがしたが、これに対する反動も、日本の「新しいナショナリズム」とも結びついて、激しさを増し、四・三事件の評価は、その「歴史の内線」の焦点として浮上している。

## 金京媛

### 「4・3文学を読む」 文学から見える済州島4・3事件

4・3事件の歴史自体が忘却と沈黙を強要されてきただけに、4・3事件のことを取り上げる「4・3文学」も長い間、語られてはいけぬタブーへの物語とされてきた。虐殺の穴門の中から生還した人のトラウマを以って、4・3事件の物語が抑圧されている現実を劇的に描いた玄基榮の「順伊おばさん」(1978年)は、「4・3文学」の原点と言うべきであろう。

「4・3文学」の例としては、反米の旗幟から4・3事件へのアメリカ軍の介入を批判し、国家保安法の違反に

当たった李山河の長編叙事詩「漢撃山」や、4・3事件の悲劇と日本帝国の植民統治とのかかわりを明らかにした玄吉彦の「身熱」などが挙げられる。

「4・3文学」は、様々な角度から4・3事件を描き出す。そして消されたり抑えつけられたりしてきた4・3歴史のなかの声やこだまを顕にしている。それは、過去だけの物語でもなければ済州道だけのものでもない。

## 金昌厚

### 「4・3事件の真相究明、 その陰難たる道のり」

済州人は民主主義の根付いた、統一国家の韓国を心から望んでいた。1948年の4・3事件がその発露である。

しかし、分断国家を樹立してしまった李承晩元大統領の独裁政権の、その対応とは、国家暴力による3万人の、罪のない済州人の虐殺であった。それから半世紀間、済州島は共産主義の蔓延る「アカの島」とされ、差別されてきたのである。

2000年、金大中(ムン・ナジュン)元大統領は「4・3特別法」を公表した。2003年、ノムヒョン元大統領は4・3事件の真相究明とともに、その犠牲者を追悼し、国家暴

力の過ちを謝罪した。被害者には少々医療費が与えられ、4・3平和公園も造成されたのである。また、遺骸発掘も進み、DNA鑑識によって71人の身元が確認された。このような成果は、平和と人権のために4・3事件の真相究明に取り組んできた人たちのお陰である。しかし、2008年の政権交替で、あの4・3特別法の成果を台無しにしようとする、保守右翼の攻撃が行われている。

済州人は「4・3平和財団」を設立し、未来へ向かっている。この地上に、4・3事件のような「血の歴史」が繰り返されないように、また済州道が真の平和の島になるように……。